

# 冷戦後の戦争と子どもの犠牲

市川 ひろみ

国際社会では、武力紛争において子どもを特別に守ろうとする規範が積み重ねられてきた。戦場においても、子どもは敵味方の区別なく、特別に尊重されるべきであるとして、国際社会がこれに取り組むようになったのは、第1次大戦以降である<sup>(1)</sup>。1924年、国際連盟において採択された「児童の権利に関するジュネーブ宣言」は、「人類が児童に対して最善のものを与える義務を負う」ことを宣言し、保障されるべき諸権利の中には、危難に際して優先的な援助を与えられる権利が含まれていた。第2次世界大戦後の1959年に国際連合は、「児童の権利に関する宣言」を採択し、緊急時には「最初に救済を受けるべき」という子どもの権利がうたわれた。1989年に採択された「子どもの権利条約」は、第38条で、武力紛争における児童の保護について定めており、「締約国は、15歳未満の者が敵対行為に直接参加しないことを確保するためのすべての実行可能な措置をとる」と規定している。さらに、2000年には、「児童と武力紛争に関する児童の権利条約選択議定書」を採択した。ここでは、18歳未満の子どもについて、敵対行為への直接参加や強制徴兵を禁止し、また軍隊への志願が認められる年齢を16歳以上とした。

このような国際的な取り組みにもかかわらず、現実には、冷戦後の戦争において子どもの犠牲は深刻化している。冷戦終結以降の戦争では、少なくとも一方の当事者が非国家アクターであり、市民が攻撃の対象とされる。子ども

(1) 現在も活動している「児童救済基金 (Save The Children's Fund)」が1919年に、戦争によって孤児になった子どもたちを救済するために英国に創設された。当時、そのような活動は、敵国を利するものであるという強い批判があった。

もも紛争の当事者となり、殺しあう場面が増えた。子どもは成長期にあり、保護を必要とするという特性から、戦争によって大きな影響を被る。本稿では、冷戦終結後の戦争が子どもたちに強いる犠牲を明らかにする。

## 1. 冷戦後の戦争の特質

1995年から2005年までの10年間に、200万人の子ども（18歳未満）<sup>(2)</sup>が武力紛争によって命を奪われ、さらに600万人が重度の傷害を負った。2003年から2005年の間には、1,150万人が国内避難民となり、240万人が難民となった<sup>(3)</sup>。子どもに大きな犠牲を強いる冷戦後の戦争の特質は、①戦争が子どもの生活に入り込む遍在性、②武器の蔓延、③戦争を規制する諸法が及ばない暴力<sup>(4)</sup>として捉えることができる。

冷戦後の戦争においては、正当な武器保持者としての戦闘員と非戦闘員、軍人や警官と犯罪者、大人と子どもといった区別は取り払われ、日常生活そのものが攻撃の対象となる。人々の間に「恐怖と憎悪」を生み出すために、凄惨な暴力行為の多くが市民に対して向けられる<sup>(5)</sup>。人々が住む地域に、地雷を敷設し、家屋、病院、市場や水源地などが攻撃される。人為的に飢餓を引き起こしたり、包囲戦を行うこともある。生活の糧を奪われた人々は、餓死するか、移住を余儀なくされる。恐怖や飢餓に駆り立てられて、戦闘への

(2) 子どもの権利に関する条約第1条「この条約の適用上、児童とは、18歳未満の全ての者をいう」

(3) *Statement before the Security Council by Olara Otunnu, Under-Secretary-General Special Representative of the Secretary-General for Children and Armed Conflict*, 23 February 2005, <http://childrenandarmedconflict.un.org/statement/23-feb-2005-security-council/> (2014年6月30日)

(4) 土佐弘之「世界内戦化と法外な暴力」、『アナーキカル・ガヴァナンス』、御茶の水書房、2006年、5～38頁、寺谷広司「内戦化する世界と国際法の展開－国際法はテロリズムを認識できるか。いかに認識するか－」、『社会科学研究』、第59巻第1号、2007年、105～132頁、他。

(5) メアリー・カルドー（山本武彦・渡辺正樹訳）『新戦争論』岩波書店、2003年、11～12頁。

参加を強いられている人も多く存在する。たとえ、ある人が暴力行為に加わりたくないと思っても、隣人たちから「協力しなければ殺す」と脅されるような状況では、中立的な傍観者でいることは不可能である。

また、冷戦時代の激しい東西軍事対立によって大量に製造された兵器が、冷戦後、余剰兵器として安価に供給され、紛争地域に大量の武器が蔓延するようになった。主に使用される武器は、ライフル銃などの小火器である<sup>(6)</sup>。紛争による直接的な死亡のうち60-90%は小火器によるという報告もある。これらの小火器は、大型の武器と異なり汎用性があり、輸送もしやすい。財力がなく、組織化されていない武装勢力であっても、入手が可能である。旧ソ連が開発したカラシニコフ銃（AK-47）が最も一般的に使用されているライフル銃で、手入れも手軽で、厳しい訓練を必要とするような熟練技術は必要ない<sup>(7)</sup>。大人と比べて体格の小さな子どもも、十分に使用できる。

冷戦後の戦争では正規軍のみならず、治安部隊、反政府武装集団、民兵、住民など多様な人々が武力を行使する。アフガニスタンやイラクにおいては、多くの業務を民間軍事会社（PMC）・民間警備会社（PSC）が請け負った<sup>(8)</sup>。軍の業務に携わっているにもかかわらず、軍事会社の社員は「民間人」であり、戦時国際法にも米軍の交戦規程にも拘束されないと主張される。

紛争地の子どもにとっては、戦争が身の回りのどこにでもあり、自分も含

(6) 小火器（小型武器 small arms・軽兵器 light weapons）とは、致命的な戦争手段として使用するため軍隊仕様で製造された兵器を指し、① 一人で携帯・使用が可能な小火器（回転式拳銃、自動式拳銃、ライフル銃およびカービン銃、小型軽機関銃、突撃銃、軽機関銃）、② 数名で運搬・使用が可能な軽兵器（重機関銃、携帯型手榴弾発射台、携帯型発射砲、携帯型対戦車用銃および無反動ライフル銃、携帯対戦車ミサイルおよびロケット発射装置、携帯用対空高射砲、口径100ミリ以下の直撃砲）、③ 弾薬及び爆発物（小型武器用弾薬筒、軽兵器用弾薬およびミサイル、対空・対戦車用可動式砲弾およびミサイル、対人・対戦車用手榴弾、地雷、爆発物）の3種類があるとされる。山根達郎「武力紛争と小型武器問題」『平成14年度外務省委託研究「紛争予防」日本国際問題研究所報告書』、63～64頁。

(7) 松本仁一『カラシニコフ』朝日新聞社、2004年、ラリー・カハナー（小林宏明訳）『AK-47—世界を変えた銃—』学習研究社、2009年、他参照。

(8) P・W・シンガー（山崎淳訳）『戦争請負会社』日本放送出版協会、2004年、本山美彦『民営化される戦争—21世紀の民族紛争と企業』ナカニシヤ出版、2004年、他参照。

めた身近な人々が戦争の当事者となり、相手を対等な存在とみなさない法外で苛烈な暴力に晒されることになる。

## 2. 子どもの特質による被害

### 2.1. 好奇心

戦場となった日常生活の場には、子どもたちにとって危険なもの—小火器、地雷、不発弾などが数多く持ち込まれる<sup>(9)</sup>。大人はそれらの危険性について知識があり、注意を喚起する標識も読むことができるが、子どもは背が低いとため標識を発見しにくいし、字が読めないかもしれない。子どもは知識・経験に乏しく危険かどうかの状況判断力は未熟である一方で、強い好奇心をもち合わせている。危険とは思わずに、不用意に不発弾に触れたりする。貧しい子どもたちはゴミ拾いを仕事にしていることも多く、危険物に触れやすい。地雷・不発弾によって汚染された地域に住む子どもたちにとって、家畜の放牧、水汲み、通学、ボール遊びなどの日常の活動が命がけのものとなる<sup>(10)</sup>。

幼い子どもたち、特に男の子は、好奇心からしばしば兵士の周りに集まってくることもあり、兵士が攻撃されたとき、巻き添えに遭いやすい<sup>(11)</sup>。子どもたちが米軍に近寄ってきた様子を、陸軍兵士としてイラクに2005年から1年間派遣された経験をもつスコット・ユーイングは、次のように証言して

(9) 武器の蔓延がもたらす子どもの被害については、市川ひろみ「ミクロの視点からみた地域紛争—紛争の担い手と『戦後』—」、月村太郎編著『地域紛争の構図』晃洋書房、2012年、277~278頁参照。

(10) 地雷、クラスター爆弾、劣化ウラン弾による子どもの被害については、市川ひろみ「戦争後の子ども—終わらない戦争—見えない脅威—」、初瀬龍平、松田哲、戸田真紀子編『国際関係のなかの子ども』御茶の水書房、2009年、125~130頁参照。地雷による被害者のうち、軍関係者は15%にとどまる。

(11) Renee I. Matos, John B. Holcomb, Charles Callahan, Philip C. Spinella, "Increased Mortality Rates of Young Children With Traumatic Injuries at a US Army Combat Support Hospital in Baghdad, Iraq, 2004", *Pediatrics*, Vol. 122, No. 5, November 2008, Downloaded from www.pediatrics.org by on December 27, 2009.p. e963

いる。「タル・アファルという人口20万人ほどの市に入って最初に気づいたのは、子どもたちがあまり怖がりもしないで私たちの車輛に接近してくることでした。（中略）まもなく私たちはお菓子を袋に入れて持っていくようになり、ブラッドレー戦闘車の銃塔にいる連中がそれを車輛の両側に投げました。子どもたちはみな、車輛の側面に殺到してなかなか立ち去らず、お菓子を取り合いました<sup>(12)</sup>」。

## 2.2. 成長過程にある身体

幼い子どもは身体が小さく、怪我が重傷になりがちである。身長の高い子どもは、地面に近いところにいるため、地雷やクラスター爆弾などの不発弾が爆発すると、大人より重大な傷となる。爆発物による負傷は、小さな子どもの場合、青少年や大人よりも体の表面積に対してより広い範囲が傷つく。銃創の場合も、大量失血に至りやすく、青少年や大人と比べてショック状態になるリスクが高い。負傷した場合、青少年は強い回復力を示すが、幼い子どもは脆弱である。バクダッドにある第31米軍戦闘支援病院（combat support hospital: CSH）の、軍関係者および市民すべての患者データベース（2003年12月～2004年12月）に基づく調査によると、病院内での死亡率は、9歳以上は4%だったのに対して、8歳以下の子どもは18%であった<sup>(13)</sup>。

四肢切断、火傷、刺し傷、鼓膜破裂、失明など様々な傷を負った子どもには、成長期特有の困難さも伴う。切断された四肢が成長して縫合部分が痛み、手術を繰り返さなければならないこともある。義手・義足を使えば生活の質が改善されるが、子どもは成長が早く、大人であれば再調整はおよそ5年毎でよいが、小さな子どもの場合には半年～1年毎に作り直す必要がある。再調整は、苦痛を伴うものであるだけでなく、経済的な負担ともなる。やけど

(12) 反戦イラク帰還兵の会／アーロン・グランツ（TUP訳）『冬の兵士 イラク・アフガン帰還兵が語る戦場の真実』岩波書店、2009年、95頁。

(13) Matos, et. al., *op. cit.* p. e962.

や切断手術を受けた子どもには、発達の遅れが見られるとする研究もある<sup>(14)</sup>。

劣化ウラン弾による居住地域の放射能汚染も、大人と比べて子どもに深刻な被害をもたらす<sup>(15)</sup>。劣化ウラン弾は、戦車の装甲などの鋼鉄に衝突して燃焼した際に超微粒子となって大気中に拡散し、土壌・水に入り込む。劣化ウラン弾による攻撃を受けた戦車や建物は、放射線を放出し続けるため、空間的にも時間的にも限定できない無差別的被害を及ぼす<sup>(16)</sup>。放射能の与える身体へのダメージは、年齢が低いほど大きい。子どもの細胞は成人に比べてより頻繁に分裂を繰り返すため、放射線によって損傷を受けた遺伝子が速く増殖する。1990～91年の湾岸戦争後、イラクでは白血病など小児癌の顕著な増加が確認されている。流産や死産、奇形胎児も増加している。

病気や障害を負った子どもには、医療をはじめとして特別のケアが必要である。それらを提供することは保護者にとっては重い負担となるため、必要なケアを受けられない子どもも多い。ほとんどの紛争地では、特別なニーズの子どものための特別な医療・福祉サービスは提供されていない。世界保健機構（WHO）によれば、途上国では、障害のある子どものうち5%しか、リハビリを含む社会的サービスを受けられない。義足や義眼などの人工器官は、それを必要とする子どもたちの10～20%にしか供給されていない。障害に応じた教育を受けるためにも費用がかさむ。国連児童基金（UNICEF）

(14) Shechter, M. and Holter, F., "The Child Amutee", Noshpitz, J., ed., *The Basic Handbook of Child Psychiatry*, Vol.1, 1979, New York, Basic Books, Galdson, R., "The Burning and Healing of Children", *Psychiatry*, 35:57-66, Earl, E., "The Psychological Effects of Mutilating Surgery in Children and Adolescents", *Psychoanalytical Study of the Child*, 34:527-546, quoted from Mona S. Mckoud, "Assessing War Trauma in Children: A Case Study of Lebanese Children", *Journal of Refugee Studies*, Vol. 5, No.1, 1992, p.3

(15) 1991年の湾岸戦争を初めとしてその後、ボスニア、コソボ、アフガニスタン、イラクでも使用された。嘉指信雄、森瀧春子、豊田直巳編『終わらないイラク戦争—フクシマから問い直す—』勉誠出版、2013年、125～126頁。

(16) 嘉指信雄、振津かつみ、森瀧春子編『ウラン兵器なき世界をめざして—ICBUWの挑戦—』合同出版株式会社、2008年、7頁。

によれば、学校に通っているのは、障害のある子どもの2%以下に留まる<sup>(17)</sup>。さらに、障害者に対する差別のある社会では、被害にあった子どもは社会的に弱い立場に追いやられてしまう。

### 2.3. 成長過程にある心

子どもにとっては、慣れ親しんだ環境や大好きなおもちゃなどを失うことは、重いストレスとなる。不安、睡眠障害、悪夢、食欲減退、遊びに無関心、発達障害、成長の遅れなどの症状が現れたり、行動が暴力的になったり、うつ状態になることもある。殺人などの残虐行為や悲惨な情景を目撃したり、身の危険を感じたりすることは、子どもにとって大きな負荷となる。そのような負荷は、子どもの日常の活動に取り組む能力を育むことに深刻な影響を与える。

ボスニア中央部での激しい戦闘から逃れてきた避難民のキャンプの6歳～12歳の364人を対象とした調査によると、大半の子どもが、両親のうち少なくとも一人と離れなければならず、3分の2近くの子どものが、戦争で大切な人を失った。ほぼ40%が、親兄弟が傷ついたり殺されたりするのを目撃していた。すべての子どもが重大なストレス症状を示し、94%は、心的外傷後ストレス障害（PTSD）の基準に達していた。9割の子どもが深刻な悲しみを経験し、半分以上の子どもが、自分たちが幸せになることはないと自身の将来について極端に悲観的な見方を示した。自身の人生に意味はないと感じていた子どもは、37.7%にのぼる<sup>(18)</sup>。

大人に保護されなければ生きられない子どもにとって、家族は安全と保護を象徴している。その親やきょうだいが、うその処刑や脅しなどによって侮辱されるといった精神的な暴力を受けているのを見ることは、子どもの心に

(17) Graca Machel, *The Impact of War on Children*, Hurst & Company, 2001, p.67.

(18) Richard Goldstein, MD, Nina S. Wampler, MS, and Paul H. Wise, MD, "War Experience and Distress Symptoms of Bosnian Children", *Pediatrics*, Vol.100 No.5 November, 1997, pp.873-875.

深い傷を負わせる。信頼していた人の無力さを目撃した子どもには、恥、幻滅、無力さといった感情が引き起こされる<sup>(19)</sup>。家族に対する激しい暴力を目撃した子どもは、自身が暴力の対象となった子どもよりも、より高い睡眠障害を示すこともあるという<sup>(20)</sup>。

自分の親や家族が殺されるのを目撃することは、子どもの記憶の混乱を招き、苦痛を強める最も強い要因となる。その子どもが、亡くなった両親について考えるとき、彼らが殺される光景－助けを求める叫び声、銃声、両親の遺体周辺の血の海－を思い出してしまう。そのため、両親の思い出が恐怖を伴うようになり、子どもにとっては、慢性的な苦しみとなる<sup>(21)</sup>。さらに、戦争は、平和な時であれば親を失った子どもが享受できる社会の支援も奪う。子どもたちが、両親のことを知っていた人々との接触をもてないことは、亡くした両親との内面的なつながりを築くことをより困難にする。紛争下では、大人たちも彼ら自身の苦しみと悲しみの中であって、子どもたちに差し出すことのできる支援は限られている<sup>(22)</sup>。

暴力が日常となっている社会で成長した子どもたちは、乱暴で反社会的な行動をとる傾向があることが指摘されている<sup>(23)</sup>。子どもたちは、平和な社会における自らのモデルとなる大人像を知らないまま、暴力的な環境を自らの思考方法、記憶に取り込む<sup>(24)</sup>。

(19) Cynthia B. Eriksson and Elizabeth A. Rupp, 'Bereavement in War Zone: Liberia in the 1990s', James Marten ed., *Children and War: A Historical Anthology*, New York University Press, New York and London, 2002, p.241.

(20) Samir Qouta, Raija-Leena Punamaeki, Eyad Sarraj, Child development and family mental health in war and military violence: The Palestinian experience, in *International Journal of Behavioral Development* 32, 2008, p.311.

(21) Eriksson and Rupp, *op.cit.*, p.94.

(22) Eriksson and Rupp, *op.cit.*, p.91.

(23) 紛争が続くなかで子どもたちが、どのように変化するかについては、ドキュメンタリー映画『アルナの子どもたち』ジュリアノ・メール・ハミス監督、イスラエル、2004年。パレスチナのジェニン難民キャンプで、劇団で明るく活動していた子どもが数年後には自爆攻撃を行う姿を捉えている。

(24) パレスチナでは、就学前の児童は英雄的な戦士像に同化し、家族と国家を守る全能のファンタジーを遊びの中で表現していた。青少年になると、英雄的な戦士になると



### 3. 子ども兵

子どもは、軍隊や武装勢力にとって好ましい資源として利用される。子どもは、誘拐や徴集によって供給することができるうえ、給料を要求することもなく安価で、小さく目立たず、敏捷である。その上、子どもは周りの大人に依存しがちであり、上官にとっては従順で扱いやすい。少なくとも30万人の子ども兵（そのうち女子はおよそ3分の1）がいると推定されている<sup>(25)</sup>。6歳以下の子どもは戦闘員の10%、未成年者は75%にも達するとされる<sup>(26)</sup>。

軍や武装組織は、村を襲撃した際や、難民キャンプ、ストリート・チルドレンがいる市場、学校や孤児院などで子どもたちを誘拐するが、自ら「志願」して入隊する子どもも少なくない<sup>(27)</sup>。「志願」の理由は、家族への反抗心や冒険心、あるいは、家庭内の暴力から逃れるためであったり、「敵」から家族を守るためなど様々である。親が殺されたり、行方不明だったり、村が焼き討ちにされたりした場合には、子どもたちだけでは生きていけない。紛争で社会が疲弊している時、彼らに保護を与えるのが軍隊だけであることも少なくない<sup>(28)</sup>。モザンビークでは、子ども兵として入隊している方が、よりよ

---

うファンタジーは、アイデンティティーの形成に影響を与え、自らが戦争に参加するために利用する様子が見られた。Raija-Leena Punamaki, "Concept formation of war and peace, Amiram Rvivi, Louis Oppenheimer", Daniel Bar-Tal ed., *How Children Understand War and Peace*, Jossey-Base Publishers, San Francisco, 1999, p.133.

(25) 子ども兵士禁止のための世界連合 (Coalition to Stop the Use of Child Soldiers) による3~4年ごとに出される報告書は、ホームページからダウンロードできる。[http://www.child-soldiers.org/global\\_report\\_reader.php?id=97](http://www.child-soldiers.org/global_report_reader.php?id=97) 戦場で武力を行使する子どもについては、松本、前掲書および市川、前掲論文 (2012年)、266-269頁参照。

(26) P.W. Singer, "Talk is cheap: Getting Serious About Preventing Child Soldiers", *Cornell International Law Journal*, vol.37, 2004, p.562.

(27) Rachel Brett and Irma Specht, *Young Soldiers: Why they Choose to Fight*, Boulder, CO: Lynne Rienner Publishers, 2004.

(28) シエラレオネでかつて司令官も勤めた16歳の少女は、次のように証言している。「私は、私が（軍隊で）学んだこと・・・について誇りをもっている。これらは政府から与えられたのではない。他にどのようにして私は将来をもてただろう？」Michael Wessells, "A Living Wage: The importance of livelihood in reintegrating former child soldiers", Neil Boothby, Alison Strang, and Michael Wessells, *A World Turned Upside Down: Social Ecological Approaches to Children in War Zones*, Kumarian

い状況にあったとする研究さえある<sup>(29)</sup>。

子ども兵は多様な仕事に従事する。戦闘任務にも就くが、多くは偵察や荷物運搬、密輸、調理、掃除、通信連絡、情報収集などに従事している。少女は、食事の準備や傷の手当てなど兵士らの身の回りの世話をさせられ、しばしば大人の上官の「妻」となることを強要される。

銃を持って戦闘に加わる危険は言うまでもないが、基地が襲撃されることもあり、他の子どもも危険な状態におかれる。子どもたちは、成長に必要な食料と睡眠が十分に確保されることも、教育や医療・保健サービスを受けることも望むべくもない。逃げだそうとして失敗した子どもが殺されるのを見ること、さらには、その子を「殺さなければ、おまえを殺す」と殺人を強制されることも珍しくない。家族や共同体とのつながりを断ち切るためや、凶暴性をもたせるために、子どもたちは自分の出身の村で残虐な行為を強要されることもある。社会的・倫理的観念が確立される前に暴力を強要されること、また、しばしばアルコールや麻薬を使って異常な精神状態にされることなどから、子どもは大人よりも残虐になりうる。子ども兵は、罪のない民間人の腕を切り落とし、強かんし、殺し、略奪し、放火し、畑を荒らし、井戸に毒を盛り、大量殺戮にも加わる<sup>(30)</sup>。

子どもたちは、大人の上官にとっては補充可能な消耗品である。コロンビアで兵士であった少女は、「もし、あなたが司令官を護衛できていないとゲリラが判断すれば、彼らはあなたを殺す。戦闘では、彼のためにあなたは命を差し出さねばならない。彼は最初に逃げ、あなたは残って敵と戦わねばならない」と語っている<sup>(31)</sup>。子どもは、大人の子兵士の損失を軽減するために、「人間の盾」とされたり、地雷原を歩かされることもある。自爆攻撃にも使用さ

Press, Inc., Bloomfield, 2006, p.184.

(29) Mark A. Drumble, *Reimagining Child Soldiers in International Law and Policy*, Oxford University Press, 2012, p.55.

(30) Machel, *op. cit.*, pp. 12-14.

(31) Ynonne E. Keairn, *The Voices of Girl Child Soldiers: Colombia*, Quaker United Nations Office, Geneva, Jan. 2003, p.15.

れる。アフガニスタンでは、2007年に国際治安支援部隊（ISAF）が、12歳と6歳の男の子が爆薬の仕込まれたベストを着せられていたケースを確認している。チェチェンでは、10代の少女を複数の男性が輪姦し、彼女の将来への希望を絶ち、自爆攻撃実行者とさせることもある<sup>32)</sup>。

子ども兵は、たとえ戦争から生きのびることができても、社会で生きていくうえで様々な困難がある。彼らが、発達に応じて社会性を身につけることができなかつた場合には、社会の中で日常生活を営むのは難しい。ましてや、アルコールや薬物の依存症、性病やその他の感染症に冒された状態で生きてゆくことの過酷さは想像に難くない。

身の危険を感じる体験、残虐行為を目撃・強制された経験、性奴隷とされた経験は、子どもたちに深い心の傷を負わせる。軍や武装勢力から解放された後も、悪夢や思い出したくない体験に突然連れ戻されるフラッシュ・バックなどに悩まされる。モザンビークで、スパイ、調理員、洗濯員、荷物運び、戦闘員などとして2ヶ月～3年間兵士となっていた39人の元子ども兵を対象とした調査によると、全員に心的外傷後ストレス障害（PTSD）の症状がみとめられた。そのうち、紛争後の生活に適応するのに特に重大な困難があったのは3人で、2年以上兵士だった子どもたちだった<sup>33)</sup>。

元子ども兵だった少女たちは、さらなる苦難に直面する。元兵士が社会に復帰することを支援するプログラムでは、治安の回復を主たる目的としてい

<sup>32)</sup> 市川、前掲論文（2012年）、268～272頁参照。

<sup>33)</sup> 1998年から2004年の16年間にわたって行われた調査による。誘拐された時6歳だったフラニセは、家族の元に戻ったが、23歳になっても結婚せず、ほとんどの時間を一人で過ごし、暴力的で気分のむらがあり、妄想的だった。近所の人々によると、「戦闘は彼の心の中で続いていた」のだった。14歳の時にモザンビーク民族抵抗運動（RENAMO）に加わり、若者旅団のリーダーになったフェルナンドは、学校はもとより家族にもなじめなかつた。仕事に就こうともせず、男友だちと飲み、兵士だったころの「よい時代」を懐かしんでいた。彼は、ある夜、酔って警官を襲ったために射殺された。Neil Boothby, "When Former Child Soldiers Grow Up: The Key to reintegration and reconciliation", Neil Boothby, Alison Strang, and Michael Wessells, *A World Turned Upside Down: Social Ecological Approaches to Children in War Zones*, Kumarian Press, Inc., Bloomfield, 2006, p.168-169

る場合が多く、女子はほとんど対象とならない<sup>34)</sup>。一般の住民からも、同じ元子ども兵であっても、少女には厳しい目が向けられる。兵士として身につけてしまった乱暴な言動は、男性の場合は許されても、女性の場合は受け入れられにくい。わけても深刻な問題となるのは、少女が、性的な搾取・虐待を受けていた場合である。彼女たちは、性的に厳しい規範のある社会では、「汚れた」存在として卑しまれる。上官の「夫」から遺棄された少女は、子どもを連れている場合が少なくない<sup>35)</sup>。面倒をみてくれる家族やコミュニティーがない場合、彼女らは、自活していかなければならないが、子どもをそばにおいて働くことを強いられる<sup>36)</sup>。

## 4. 社会機能の低下による子どもの犠牲

### 4.1. 社会基盤の弱体化による被害

武力行使による直接の被害は、子どもたちに強いられる犠牲の一部でしかない。戦争によって社会基盤が破壊されることによる影響は、広範囲に及ぶ。

戦争では、軍事戦略の一環として、社会構造の破壊を目的とした危害が加えられる。道路や橋、鉄道等は、戦略物資の運送を妨害するために、たびたび破壊される。検問所を設けて通行が管理されることもある。そのことは、物資の流通を阻害し、食料不足を悪化させ、子どもたちの栄養失調を招く。道路や上下水道、通信網などの生活の質に大きく影響する社会のインフラが機能しなくなることによっても、保健・衛生状態が悪化する。医療施設も攻

<sup>34)</sup> Susan Mckay, "Girlhoods stolen: The plight of girl soldiers during and after armed conflict", Boothby et.al., *op. cit.*, p.99.

<sup>35)</sup> Michael G. Wessells, *The Recruitment and Use of Girls in Armed Forces and Groups in Angola: Implications for Ethical Research and Reintegration*, Ford Institute for Human Security, 2007. ([http://kms1.isn.ethz.ch/serviceengine/Files/ISN/45789/ipublicationdocument\\_singledocument/d0a1d86a-2054-44eb-adf1-dc7bb57f2aca/en/2007\\_Recruitment\\_Use\\_Girls.pdf](http://kms1.isn.ethz.ch/serviceengine/Files/ISN/45789/ipublicationdocument_singledocument/d0a1d86a-2054-44eb-adf1-dc7bb57f2aca/en/2007_Recruitment_Use_Girls.pdf), 2012年7月12日閲覧)

<sup>36)</sup> Mckay, *op. cit.*, p.102.

撃対象とされる。戦争直後のシエラレオネでは、地方にある保健施設のうち60%以上が機能していなかった<sup>37)</sup>。栄養、医療・保健サービス等の不足は、下痢による脱水症状や呼吸器疾患などによる死をまねく。栄養状態が悪いと、子どもは、軽微な病気でも死に至る。1998年から2001年の間に、コンゴ民主共和国東部の武力紛争において死亡した250万人のうち3分の1は、5歳未満の子どもだった。直接的な暴力によって殺されたのは14%（約35万人）で、残りは、病気や厳しい環境のために死亡した。彼らの死因は、マラリア、下痢、栄養失調、呼吸器疾患だった。国連保健機関（WHO）によるボスニアでの1992年からの紛争による感染症についての調査は、水の供給不足のために前年と比較して、感染症の割合が激増（A型肝炎約4倍、全腸炎約13倍、疥癬約15倍）したことを示している<sup>38)</sup>。

地方では学校が唯一のしっかりした建造物であることも理由として、攻撃、占拠、破壊の対象となる。教師は、社会的に影響力があるとみなされるため、攻撃の対象となる。2006年8月からの1年間でアフガニスタンの南部諸州では、133件の学校襲撃事件があり、721校中384校が閉鎖された。イラクでは2005年に296名の教育スタッフが犠牲になり、180名の教員が殺され、2006年2月から11月の間には、280人の学識者が殺されている<sup>39)</sup>。このような攻撃は、それに直接巻き込まれた人々に被害をもたらすに留まらない。人々は攻撃をおそれて、子どもたちを学校に通学させなくなる。治安の悪化したアフガニスタンでは、10万5千人の子どもたちが、教育を受けられなかつ

<sup>37)</sup> *Report of the Special Representative of the Secretary-General for Children and Armed Conflict*, A/62/150, 13 August 2007, United Nations General Assembly (以下 *Report*), p. 20

<sup>38)</sup> 1993年ボスニア・ヘルツェゴヴィナでの1,608,000と推定される人口のうち45,200の報告による。Julius Weinberg and Stephanie Simmonds, "Public Health, Epidemiology and War", *Soc. Sci. Med.* Vol. 40, No.12, 1995, p.1665.

<sup>39)</sup> Brendan O'Malley, 'Education under attack', *A global study on targeted political and military violence against education staff, students, teachers, union and government officials, and educational institutions*, Commissioned by UNESCO, Education Sector, Division for the Coordination of United Nations, 27 April 2007, p. 2.

たと推計される。

戦争によって社会全体が疲弊すると、学校教育は量的にも質的にも著しく悪化する。ルワンダの内戦では、教師の3分の2は殺されるか、避難した。北部ウガンダの学校では200人以上のクラスは珍しくない。子どもたちは、教科書もなく、十分な訓練を受けていない教員に学ばねばならない<sup>(40)</sup>。学校が閉鎖されたり、教育の質が低下すると、子どもは基本的な読み書き・計算の能力を身に着けることができない。健康・衛生管理に関する知識が得られないために、子どもたちの罹患・死亡する可能性も高めることにつながる。

## 4.2. 治安の悪化による被害

治安の悪化が、子どもたちにもたらす被害も看過できない。戦争によって、国家の秩序を維持する機能が低下し、武器が広く社会に蔓延すると、犯罪行為にも使用されるようになり、治安が悪化する。イラクでは誘拐事件が急増し、専門職の人々の国外への流出を促した。それは、保健・医療のサービスをさらに疲弊させる。

紛争中・紛争後は性的暴力が急増し、特に少女（少年を含む）は、強かん、拷問、性的奴隷、人身売買、強制結婚のターゲットとされる<sup>(41)</sup>。コンゴ民主共和国では、性的暴力の被害者のうち33%が子どもだった。被害者は、精神的なトラウマだけでなく、痔、感染症、低年齢の妊娠、出産時の合併症など長期間にわたる深刻な健康問題に苦しむ場合も少なくない<sup>(42)</sup>。さらに、強かんの結果生まれた子どもも、社会の周辺に追いやられる<sup>(43)</sup>。

(40) *Report*, p.18-20. イラクでは、350万人の大学生のうち30%しか授業に出席できなかった。バクダットの大学では、出席率が40%～30%まで低下した。3000人以上の学識者が国を離れたと考えられている。O'Malley, *op. cit.*, p. 3.

(41) Kathryn Farr, "Extreme War Rape in Today's Civil-War-Torn States: A Contextual and Comparative Analysis", in *Gend. Issues* (2009) 26:1-41, p.11.

(42) *Report*, p.19.

(43) *Ibid.*, p.18-19.

### 4.3. 家族による保護の喪失

戦争によって親や家族と死別あるいは生き別れてしまう子どもは、数限りない。親と離れた子どもは、不安、恐怖、帰属感・アイデンティティーの喪失、身体的・精神的なストレスにさらされる。このような精神的なストレスは、子どもの心身に大きな影響を与える<sup>(44)</sup>。

子どもたちは、親が殺害されたり、避難するにはぐれてしまったり、自身が誘拐されて、親と離れてしまう。紛争時の過酷な環境では、親が傷病死するリスクも高い。家族と一緒に難民となった場合にも、キャンプを移動する際に、幼児がついていけなくなったり、迷子になってしまって、親と離れてしまう場合もある。ルワンダで、1994年に施設に収容されていた保護者のいない子ども8,628人のうち、41%（3,442人）は、両親と死別、35%（3,043人）は、両親の状況がどうなっているのか知らなかった<sup>(45)</sup>。

紛争時は、社会基盤が破壊され、大人であっても生き延びることは容易ではない。そのような状況にあって、家族と離れてしまった子どもたちは、教育や保健サービスを受けることが困難になり、さらなる搾取と虐待のリスクが高まる。戦闘から逃れる際、水も食料も十分でない中を何日も歩かなければならないこともあるが、体力・抵抗力の弱い子どもは早く衰弱する。子どもだけで避難している場合、攻撃や地雷などの危険から身を守る力が弱い。なかんずく少女は、道端で、もしくは、国境を越えるときや検問所を通る際に性的に搾取される危険が高い。

親を亡くした子どもは、自らの身元を明らかにする書類も失うと、自分の

(44) Amy Hepburn, "Running Scared: When children become separated in emergencies, Boothby", Strang, and Wessells, *op.cit.*, p.70. 子どもを守る家族の役割についての研究によると、第2次大戦時、空襲に遭遇しても家族が子どもを守る役割を担うことができれば、子どもは回復力を示した。反対に、疎開して比較的安全であると考えられていたが、家族から離れている子どもは、より脆弱であった。Alastair Ager, What is family?: The nature and functions of families in times of conflict, Boothby, Strang, and Wessells, *op.cit.*, p.48.

(45) Hepburn, *op. cit.*, pp.68-69.

家の土地を相続できなくなるなどの不利益を被ることがある。年少であれば、自分の名前、出自やアイデンティティーさえ分からなくなってしまうこともある。また、たとえ土地を相続できても、作物を育てるための知識や体力が欠けていると生活していけない。畢竟、子どもだけの世帯は、軍隊や武装勢力に加わったり、危険で違法な労働や売春に携わるようになりがちである。

最も保護を必要とする子どもの安全・尊厳が、それを守るべき人々からも脅かされている。国連平和維持軍兵士、難民や国内避難民を保護・支援する責任のある団体に雇用されている人さえもが、その地位を利用して、子どもを搾取・虐待する。国連の行った調査によると、国連難民高等弁務官事務所働く職員も含む人道支援にあたる要員が、主に少女たちと性交渉をもつために、支援物資や食糧を利用していた例が報告されている。10歳の少女さえも、1ドルほどのお金、卵2つ、ミルク1杯、ピーナツバターといった食べ物と引き換えに性的行為をさせられていた。強かんした後に、あたかも同意があったかのように装うため、お金や食べ物を与えられることもあった<sup>(46)</sup>。コンゴでは、国連平和維持要員（軍・民間）が残した子どもたちが増えていく<sup>(47)</sup>。性的搾取・虐待の結果生まれてきた子どもたちも、虐待の被害者である。彼らは、家族や共同体から白眼視されがちである。

紛争下では、共に暮らしている親があっても、子どもたちに保護を与えな

(46) U.N. Doc. A/59/710 (24, March 2005) Zeid Ra'ad Al Hussein 元文民平和維持要員による報告書 *Comprehensive review of the whole question of peacekeeping operations in all their aspects, Note for Implementing and Operational Partners on Sexual Violence and Exploitation: The Experience of Refugee Children in Guinea, Liberia and Sierra Leone based on Initial Findings and Recommendations from Assessment Mission, 22 October - 30 November 2001*, UNHCR and Save the Children-UK, February 2002, *Fewer words and more action: Evaluating the progress made in ending the commercial sexual exploitation of children*, Rachel Harvey, ChildRIGHT, March 2002, issue 184., U.N. Doc. SC/8649 (23, Feb 2006)

(47) Colum Lynch, "Report on Abuse Argues DNA Tests for Peacekeepers", *Washington Post*, Mar. 25, 2005, at A15, Muna Ndulo, "The United Nations Responses to the Sexual Abuse and Exploitation of Women and Girls by Peacekeepers During Peacekeeping Missions", *Cornell Law Faculty Publications*, Paper 59, 2009.



いばかりか、自らの子どもを危険な状況に追いやってしまう家族も少なくない。障害や病気のある子は、両親や世話をしてくれる人がその役割を負いきれず、遺棄されるか、身体的・心理的虐待にあうリスクが高い。家族が障害児を通学させるかわりに、道で物売りさせることもある<sup>(48)</sup>。北部アフガニスタンに住む多くの貧しい家族は、しばしば10歳を過ぎたばかりの若い娘を50歳代の男性と結婚させる。このような結婚は、羊などと交換に娘を「売った」親には経済的な利益をもたらすが、少女は、嫁を「買った」と考える夫やその家族から尊重されることは期待できない。そればかりか、身体的、精神的な虐待を受ける可能性が高い。また、若年での妊娠出産にともなう合併症および死亡のリスクにもさらされる。強かんの結果生まれた乳児を養育できない・養育したくない母親は、出産した病院に子どもを遺棄する。

## 5. 「対テロ戦争」と子どもの犠牲

### 5.1. 子どもとして保護されない子ども

2001年9月11日の「同時多発テロ」事件に対して、米国は「対テロ戦争」を宣言し、アフガニスタン、イラクに軍事介入してきた。戦場においても子どもは特別に守られるべき存在であるという国際的な規範に米軍は従わず、子どもも逮捕、拘束、尋問、そして殺害する。「敵」に、年齢による区別はない。

米軍兵士は、派遣されたアフガニスタンやイラクで、頻繁に子どもに遭遇する<sup>(49)</sup>。両国とも、総人口の約半数が18歳未満である。米軍への攻撃に加わる子どもたちもいる<sup>(50)</sup>。米軍は、実際に武力行使をした子どものみならず、

(48) Alastair Ager, "What is family?: The nature and functions of families in times of conflict", Boothby, Strang, and Wessells, *op.cit.*, p.50.

(49) P.W. Singer, "Fighting Child Soldiers", *Military Review*, May-June, 2003, p. 26.

(50) バクダッドにある米軍戦闘支援病院へ運び込まれた子どもたちのうち、8歳以下の子どもで敵戦闘員と判断されたケースはなかったが、9～17歳では66名中10名(15%)が敵戦闘員とみなされた。Matos, et. al. *op. cit.*, p. e961-962.

危険だと思われれば、子どもでも殺傷した。陸軍 101 空挺師団機関銃手としてイラクにいた 21 歳のニック・ボグスは、10 歳にも満たない子どもに向けて発砲し、殺害した。この子どもは、米軍との激しい戦闘によって路上に残された携行式ロケット砲 (RPG) を回収しようとしたのだった。「一日中攻撃され続けていれば、それが兵士か子どもかは重要ではない。RPG がわれわれを傷つけるということに意味がある」<sup>51)</sup>。米軍の兵士にとっては、子どもであっても、自らと部隊の仲間の命に対する脅威である。2002 年 1 月、アフガニスタンでの戦闘で、一人の米軍軍曹が 14 歳の少年によって殺されたと報道された<sup>52)</sup>。

イラクで頻繁に行われた家宅搜索では、子どもたちの目の前で父親や兄弟が暴力的な扱いを受け、連れ去られた。また、子どもであっても容疑者として逮捕・収容し、拷問が加えられた。国連子どもの権利委員会への 2008 年の報告によると、2002 年以来、米国はイラクで 2400 人、アフガニスタンで 100 人の子どもを拘束してきた。アフガニスタンでは 800 人、2008 年 5 月にキューバの米軍グアンタナモ基地に設けられた収容所には 21 人が収容されていたとする報告もある<sup>53)</sup>。

バグダットにあるアブグレイブ刑務所では、子どもに対しても、親に会わず、教育を剥奪した。さらに、独房での監禁、強かん、犬を使つての威嚇や教育の剥奪、苦痛を伴う姿勢での拘束という方法が採られた。17 歳の少女に対する性的虐待<sup>54)</sup>や親に証言させるための手段として、子どもを虐待す

51) Matthew Cox, "War even uglier when a child is the enemy, A boy darts for a weapon, and a young soldier must make a wrenching decision", *USA Today*, April 8, 2003.

52) Center for Emerging Threats and Opportunities Marine Corps Warfighting Laboratory, "Child Soldiers: Implications for U.S. Forces", *Seminar Report*, November 2002, p.7.

53) Henry A. Giroux, *Hearts of Darkness: Torturing Children in the War on Terror*, Paradigm Publishers, Boulder/London, 2010, p. 66.

54) Shereen T. Ismael, "The Cost of War: The Children of Iraq", *Journal of Comparative Family Studies*, Spring 2007; 38, 2, p.354.

ることさえ行われた<sup>55)</sup>。

アフガニスタンやイラクの子どもたちを殺傷した米軍兵士の中には、「まだほんの子ども<sup>56)</sup>」の若者が含まれていたことも想起しておきたい。派遣される米軍兵士には、18歳になったばかりの若者も決して少なくない。彼らの多くは、ファストフード店での低賃金労働やトレーラーハウスでの生活から脱することを夢見て、米軍に入隊することを「志願」した子どもだった。2003年4月にイラクで戦死した18歳の若者は、重量挙げのグローブがほしくて海兵隊に資料請求し、2001年6月に入隊したのだった。

## 5.2. 米兵の子どもの被害

家族と引き離されないことは、子どもにとってはきわめて重要である。両親が米軍兵士と共に派遣されてしまい、一度に両親から引き離された子どもたちもあった。米国国防省によると、一人親兵士の数は湾岸戦争の頃の47,685人（1992）から90,000（2003年）へとほぼ倍増している<sup>57)</sup>。子どもにとって、自分を守り育ててくれる親がそばにいないことの不安は大きい。まして戦場は、命の危険がある。子どもたちは親が死んでしまうのではないかと不安になる。学齢に達しないような幼い子どもは、親が家からいなくなることについて、自分のせいだと感じてしまう。

<sup>55)</sup> 病気の15歳の少年は、重い水のはいった缶二つをもって走らされた。立ち止まると打たれ、倒れると、服を脱がされ水をかけられた。そこに、ずきんを掛けられたその少年の父親が連れてこられた。彼が、残忍に扱われた息子を前に、証言するよう脅迫されたことは疑いようがなかった。Giroux, *op.cit.*, p.64.

<sup>56)</sup> バクダットで戦死した18歳の息子をもつ両親が、ブッシュ大統領からのお悔やみの手紙に応えた文章で使った表現。Jürgen Todenhöfer, *Andy und Marwa. Zwei Kinder und der Krieg*, München: Bertelsmann Verlag, 2005、ユルゲン・トーデンヘーファー『アンディとマルワーイラク戦争を生きた二人の子ども』平野椰子訳、岩波書店、2008年、117頁。

<sup>57)</sup> Robert J. Urano, Ann E. Norwood, “The Effects of War on Soldiers and Families, Communities and Nations”, Robert J. Ursano, Ann E. Norwood, ed., *Emotional Aftermath of the Persian Gulf War: Veterans, Families, Communities, and Nations*, Washington DC, London, American Psychiatric Press, 1996, p.541.

戦闘地域に派遣された配偶者をもつ人のストレスは、子どもへの虐待を増加させる。最もよく見られる虐待は育児放棄（ネグレクト）で、夫の派遣期間中、妻によるネグレクトの割合は4倍、身体的虐待の割合は2倍に増加した。2001年9月～2004年12月までに少なくとも1回戦闘地域に派遣されている兵士がいる家族に、1,985件の子どもの虐待が報告されている<sup>58)</sup>。

親を失う子どもたちは、守り育ててくれる存在を失い、心に深い傷を負う。イスラエルで、2歳から10歳の時に父親を軍事作戦で失った25人の子どもたちを対象に継続的になされている研究によると、半数の子どもに、父親の死から3年半以上経ってもなお、行動と感情に重大な問題がみられた<sup>59)</sup>。

親が「無事に」帰還しても、子どもたちは、安心できない。アフガニスタンおよびイラクからの帰還米軍兵士のうちPTSDの症状に苦しむ人は30万人に達している<sup>60)</sup>。兵士が戦場で受けた心の傷は、家族にも戦場の疑似体験をさせることになる。3～4歳の子どもが、飛行機やヘリコプターが飛んでいると、親のするようにベッドの下に隠れたり、戦争の悪夢にうなされ、死

58) 結婚していない親、将校、兵士が2人いる家族を除いた1771件について分析している。Alison Willams, "The Nation - Toll on deployed soldiers' children is studied - Neglect - mostly by female spouse - rises when one parent goes to war, researchers say", *Los Angeles Times*, August 01, 2007 ( <http://articles.latimes.com/2007/aug/01/science/sci-abuse1> 2008年9月16日)

59) Peter S. Jensen, Jon A. Shau, "The Effects of War and Parental Deployment Upon Children and Adolescents", Ursano, *op. cit.*, p.88.

60) 都市では民間人を巻き添えにしてしまう危険についても注意しなければならず、兵士は、強い緊張を強いられる。Brett T. Litz, S. M. Orsillo, M. Friedman, P. Ehlich, A. Batres, "Post-traumatic stress disorder associated with peacekeeping duty in Somalia for U.S. military personnel", *American Journal of Psychiatry*, 154, 1997, 178-184. イラクでは62%の兵士が交戦規定のために、脅威が感じられる場合であっても攻撃的に対応できなかったと答えている。このような状況によって、ストレスホルモンが過剰に分泌され、健康維持・回復、適応能力について気づかぬうちに、重大な結果をもたらしがちである。Brett T. Litz, *The Unique Circumstances and Mental Health Impact of the Wars in Afghanistan and Iraq*, National Center for PTSD Fact Sheet. 市川ひろみ「戦場の被害者－傷つく兵士」、同『兵役拒否の思想－市民的不服従の理念と展開－』明石書店、2007年、39～57頁。

傷することを恐れたりする（二次的トラウマ化）<sup>(61)</sup>。

心に傷を負っている帰還兵は、薬物使用やアルコールに依存することが多い。これらの行動は、社会生活をさらに困難なものとし、失業に至りやすく、家族の生活基盤を危うくすることにつながる。また、親しい人との関係を保てなくなり、穏やかな家庭生活を営むことが難しい。家族への暴力を目撃することは、子どもに－戦場の子どももそうであったように－自身が直接暴力の対象とされる以上の精神的なダメージを与える。

イラクに派遣された米軍兵士のおよそ30%に相当する1万人は女性で、3人に1人は子どもをもつ母親だった。彼女たちも、イラクではいつ攻撃されるかわからない危険な状況におかれ、死傷している。米国では、PTSDに苦しむ女性帰還兵が増加していることが注目されるようになってきている。州兵だったマーシー・メットカルフは、イラクではトラックの運転手として、地元の人たちに医療機器や水などを届ける活動にも参加していた。ある日、自分に向かって手を振る男の子に気づき、運転していたトラックを止めようとした。その時、その男の子が発砲したため、彼女は夢中で反撃した。12歳だったその少年は死亡した。彼女は帰国後PTSDを発症し、さらに、結婚、出産したことで、彼女の苦しみは深くなった<sup>(62)</sup>。帰還後、以前のように自分の子どもの愛することができなくなる母親もいる。子どもたちは「別人」になってしまった母親に戸惑い、苦しむ。

親が戦場でうけた身体的な被害が、世代を超えて子どもに引き継がれることもある。劣化ウラン弾が使用された湾岸戦争や旧ユーゴ戦争に派遣された

(61) このような症状は、PTSDのある第2次大戦・ベトナム戦争の帰還兵やホロコーストの生存者の子どもにも見られる。PTSDのあるベトナム帰還兵を親にもつ子どもが受ける様々な影響については、Aphrodite Matsakis, *Vietnam Wives: Facing the Challenges of Life with Veterans Suffering Post-Traumatic Stress*, The Sidran Press, Baltimore, 1996, p.228-277. を参照。

(62) 「子どもの顔を毎日見ていると、自分がしたことを思い出します。」「愛がなんであるかについては混乱しています。私は人の命を奪ったのですから。それも、子どもの命を……」高倉基也、前掲書、120～129頁。

英国軍、米軍、イタリア軍兵士たちには、健康障害が多く見られる。彼らが帰還後にもうけた子どもたちに、手足の未発達などの先天的障害のある場合が少なくない<sup>63</sup>。米国ミシシッピ州の調査によると、251名の帰還兵が帰還後もうけた子どもの67%に重度の疾患、先天性の障害がみられた<sup>64</sup>。この子どもたちは、生まれながらに戦争による傷を負わなければならない。

## おわりに

冷戦後の戦争に巻き込まれた子どもたちは、朝起きて水を汲みに行く際に、クラスター爆弾の不発弾を爆発させてしまうかもしれないし、通学途中に路肩爆弾が炸裂する危険にさらされる。学校に無事着いたとしても、級友や教師は戦乱を逃れていないかもしれない。授業を受けることができても、攻撃されるおそれがある。学校帰りに遊んだり、農作業を手伝ったりしているときにも地雷の危険にさらされる。戦闘が激しければ、家を失い、安全な場所を求めて逃げ出さなくてはならない。親や親しい人が目の前で虐待・殺害されるのを目撃することも珍しくない。戦争の傷を負って生まれてくる子ども、死んで生まれてくる子ども、生まれながらに「敵」視される子どももいる。

戦争によって社会基盤が破壊されると、子どもも大人も厳しい状況に追いやられる。そのような状態にあって、大人は子どもを十分に保護することができない。それどころか、被害のしわ寄せを弱い子ども、それも、社会的により弱い立場におかれる女の子や孤児、乳幼児、病児、障害児らに押し付け、子どもの尊厳を踏みにじり、生命までを搾取する大人もいる。国際社会からの支援を届けるべき平和維持軍兵士や国際機関職員さえもが、子どもの弱みに付け込む現状がある。

このような過酷な状況にあっても、子どもは計り知れない可能性を秘めて

<sup>63</sup> 佐藤真紀『ヒバクシャになったイラク帰還兵』大月書店、2006年他。

<sup>64</sup> 劣化ウラン研究会『放射能兵器・劣化ウラン』技術と人間、2003年、28頁。

いる。少なくはない元子ども兵が、生産的で面倒見のよい大人になっている。彼らは、経済的に自立し、配偶者からパートナーとして受け入れられ、親として自らの子どもの幸せのために積極的に取り組み、コミュニティーの共同作業にも従事する<sup>(65)</sup>。イシメール・ベアは、シエラレオネで12歳から3年間にわたり少年兵として激しい戦闘を戦い、数多くの人々—大抵は自分と同じような少年たちだった—を殺害した。彼は、ユニセフに救助された後、米国で大学進学を果たし、自らの経験を活かして、国際人権NGOで活動するようになった。彼は、「戦場での残酷さや悲惨さを経験しても、ぼくはいまだに人間性を信じることができます」と語っている<sup>(66)</sup>。子どもたちは、子ども時代の辛い経験があっても、コミュニティーの人々や国際機関や国際NGOなどからの支援を得て、子どもの人権・福祉のために活動する青年に成長することができる。

---

(65) Neil Boothby, *When Former Child Soldiers Grow Up: The Key to reintegration and reconciliation*, Boothby, Strang, and Wessells, *op. cit.*, p.176.

(66) Ishmael Beah, *A Long Way Gone: Memoirs of a Boy Soldier*, New York: Sarah Crichton Books, 2007、邦訳、イシメール・ベア『戦場から生きのびて—ぼくは少年兵士だった』忠平美幸訳、河出書房新社、2008年、5頁。ルワンダの大虐殺の時、14歳だったアニック・カイテジは、殺された母親の血をふき取ることを強いられるという苛烈な体験をした。彼女は1994年にフランスにのがれ、修士課程で政治学を修めた。2005年に帰国し、虐殺を生きのびた寡婦およびHIV / AIDS児の保護や、女子教育の促進などの活動に従事するようになった。アニック・カイテジ『山刀で切り裂かれて』浅田仁子訳、アスコム、2007年、281頁。